

家父長制の外部に向けた許蘭雪軒の脱走的な夢想

李, 亨大
高麗大学校文科大学国語国文学科 : 教授

<https://doi.org/10.15017/4494270>

出版情報 : 韓国研究センター年報. 20, pp.97-109, 2020-03-29. Research Center for Korean Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

家父長制の外部に向けた許蘭雪軒の脱走的な夢想

李 亨 大*

(翻訳：朴美姪**)

1. はじめに

朝鮮時代の女性の中で許蘭雪軒ほど明確に評価が分かれ、数多くの噂話のヒロインになった女性は稀であろう。当代の中国において早くから卓越した女流詩人として詩名を高めた許蘭雪軒は、朝鮮と日本においても次々と詩集が刊行され、韓国史上、初めて三国において名を広めた詩人である。しかし、この天才詩人は名声が高いほど、否定的な噂をたてられたが、その一つは淫乱であることで、もう一つは中国の詩を盗作したということであった。まず、その噂話の一部について探してみたいと思う。朝鮮後期の卓越した実学者で進歩的な知識人であった洪大容は、1765年から1766年までの間に使行団の一員として北京に向かう。ここで一生の知友となった潘庭均、厳誠らに出会い、夜が明けるまで話し合うが、1766年2月8日の対話の中には以下のような内容が含まれている。

潘生（潘庭均一筆者）が曰く

「東方の婦人たちの中で詩を能く作る者がいるだろうか。」

私（洪大容一筆者）が答えて曰く

「我國の婦人は言文で手紙を送るだけです。子供の時から言文を教えないので、文章ができる婦人は少ないだけでなく、詩句を作り謳うことを尊ぶのは尚婦人のやることではあるまい。それゆえ、文が作れても評価されず、また評価されるといっても有識者は立派だとは思わないです。」

* 高麗大学校文科大学国語国文学科教授

** 九州大学大学院地球社会統合科学府博士後期課程

(中略)

潘生が曰く

「そうしたら關雎と葛覃は聖女が作った文ではありませんか？」

私が答えて曰く

「聖女の徳があれば可いことだろうが、聖女の徳がなければ放蕩するだろう(…)」

潘生が曰く

「東國の景樊堂（許蘭雪軒一筆者）は許筠の妹で、詩が上手なのでその名が中国に伝わり、その作品が中国の詩集に載せられ、萬歳に朽ちないから多幸なことではなかろうか」

「徳行で名が伝わらず、詩を一寸するだけの名が朽ちないといって多幸といえるだろうか。またこの婦人が詩律は最も高いものの、徳行はその詩に及ばないので、夫の金誠立は自分自身が才能と顔立ちが優れてないことを嘆き、文章を作って「願わくば世の中で金誠立と別れて、地下では永らく杜牧之を追いたまえ」と言うが、それは詩を作る才能のせいで婦人が身の程を知ることができないわけだから、警戒すべきではなかろうか」¹⁾

(洪大容、『乙丙燕行録』1766年2月8日)

女流詩人に関する話の中で、中国人の潘庭均は許蘭雪軒について話を持ち出し、許蘭雪軒の詩が中国

1) 洪大容著、キム・テジュン、パク・ソンジュン訳『山海関 閉めた戸を一手で押し開ける——洪大容の北京旅行記〈乙丙燕行録〉』ドルベゲ、2001年、263～265頁。本稿では許蘭雪軒と関連した多数の先行研究を参照し、引用したが、可読性を高めるために脚注を省略している。文末の参考文献を参照されたい。

にまで伝わり、長らく不朽の詩名を残しているのは多幸なことであると言う。それに対する洪大容の答弁は予想外である。蘭雪軒の德行は作られた詩ほど優れておらず、かえって警戒すべきだと言う。また、洪大容は許蘭雪軒の字の来歴について間違った認識をしている。後日、朴趾源も同じく使行に参加し、中国で類似した経験をすると、朴趾源は許蘭雪軒の字に対する誤った認識を直したものの、許蘭雪軒について良い評価を下しているわけではなかった。

大抵閨中にいる女性が詩を詠むということは、固より美しいことではないが、外国の女性として美しい名が中国に知られたことはまさに名誉であると言ってよい。だが、かつて我国の婦人たちは名前や字號があげられることがなかったことを考えれば、蘭雪軒の号があげられたのは一度だけでも度が過ぎることであろう。しかも至る処に景樊という間違った名前で記されたら、千年が経っても拭うことができないため、才思のある閨房の女性の正しい教訓にすべきではなかろうか²⁾。

（朴趾源、『熱河日記』、〈避暑録〉）

上記の内容は、許蘭雪軒の字である景樊が、中国の詩人樊川杜牧の美しい風貌に憧れて作られたという清国の知識人の誤解を、朴趾源が考証したものが³⁾、この考証の前提となる内容は全く納得できない。燕巖はどんな人物だったのか。ふちや文字までも摩耗した葉銭を通じて、長い歳月をかけて若後家が堪忍してきた涙ぐましい情念との戦いを暴露し、婚礼を挙げただけの夫の三年間の喪が明けると服毒自殺をした青春寡婦に関する生々しい報告を通じて暴圧的な女性現実を告発した進歩的な知識人が、燕巖の朴趾源ではなかったろうか。そうした彼が「閨中にいる女性が詩を詠むということは、固より美しいことではない」と言う。ここで朴趾源個人の意識

世界が狭小であると指摘する前に、このような考え方は封建時代における朝鮮の男性には普遍的な思考であったことを考えてもらいたい。この時代における「文」というのはあくまでも男性の独占的な記号であり、支配のコードであったといえる。

「ペンですべての権力と価値、文明と法を形成したのは疑いなく男性」であったという発言に異議を唱える人はいないだろう。さらに、性理学の垂直的な秩序が強固であった朝鮮時代の家父長制下において女性たちの文筆活動は許されない行為であったといえる。儒教、特に性理学を国家理念としていた朝鮮時代に、性理学の実践的な人間象から女性は排除されていた。性理学の人性論では、天から豊富な性情を与えられた人間は、男性に限る。男性だけが「修己治人」になれる生まれつきの資質を持っているため、学術と文芸を修めることができ、公的な空間において国家経営に参加することができたのである。

「女子の無才がかえって徳」とされていた朝鮮時代において、女性の教育は家庭を管理するための婦徳の涵養に焦点が当てられ、列女伝のような修身書や教訓書が読める程度の言文を学べば充分であった。女性の言語は家の壁を超えることを禁じられ、徹底的に私的な空間に限って通用することができた。当時の女性たちが駆使できるのは音声言語とハングルだけであった。社会的な力ともいえる権力の言語であった漢文は女性には許されなかった。そのため、許蘭雪軒につきまとう否定的な認識の根源は、男性が独占していた記号体系を共有したことから始まったといえる。すなわち、彼女の冤罪は漢文を巧みに使いこなしたこと、それだけである。こうしたところは許蘭雪軒をはじめ、女性文人に注目する理由と関係がある。許蘭雪軒は専制君主制の領土内で男性的な支配秩序に逆らい、既存の男性中心的な言語を自分自身の言語として新しく変形し、生成していった。彼女は支配的な価値の境界を揺さぶりながら、その中で他者の言語を排除した新たな空間を創造したという点で「脱走者」と定義していいだろう。脱走というのが既存の価値に対して批判をすると同時に、新たな価値の創造と生成を内包する変革的な運動であることを考えれば、彼女は時代的な制約を超

2) 朴趾原著、キム・ヒョルチョ訳『熱河日記 3』ドルベゲ、2009年、50頁。

3) 大抵許蘭雪軒の字である景樊は女道士の樊夫人を憧れたために作られたと知られている。樊夫人は道術の修行を行い、夫の劉綱と共に昇天した神話的な人物である。

え、さらには女性性という新しい人間主義のビジョンを模索する今日の状況においては、改めて回顧すべき重要な人物である。それでは、蘭雪軒の人生と彼女が駆使した言語の形式を探りながら、女性主義的な視点から彼女の本来の姿を改めて再現してみたいと思う。

2. 〈學詩〉の過程と閨房での涙

1563年、許蘭雪軒は江陵草堂里に在る陽川許氏の名家に生れた。父親は李滉の弟子で当時大司憲まで務めた許曄である。吏曹判書を務めていた長兄の許箒、当時嘱望される官僚で文学的な才能を持っていた次兄の許筠、天才的な気質が多分であった弟の許筠がいた。大文章家で生れた許蘭雪軒は、その才能を兄の許箒に見いだされ、兄の配慮で三唐派の詩人の一人で名声を広めた李達から詩を学ぶことができた。このように開放的な家風の中で許された、詩を学ぶ過程において、彼女の天賦の才は早くから発現され、のちに賞讃と妬みの対象として注目された。

詩を学ぶ中で、許蘭雪軒は、次兄の許筠に多大なる後援と激励を受けた。

以前神仙の国から贈られてきた文房の友を

仙曹舊賜文房友

秋の閨房に送り景色を描いてもらおう

奉寄秋閨玩景餘

梧桐の木を眺めつつ月光も描いてごらん

應向梧桐描月色

燈火に随い蟲と魚も描いてごらん

肯隨燈火注蟲魚

(許筠著、キム・ソンナム訳〈妹に送る文(送筆妹氏)〉)⁴⁾

この『杜律』詩集一冊は公寶が筆写して記録したものだが、虞註に比べて簡単明瞭で読みやすい。万曆甲戌年に王命を奉じて祝賀使節として行く旅

程の中で通川に寄った。偶然に陝西省の舉人王君之符に出会い、一日中話し合った。別れる際にこの本をもらった。私が本箱に宝物のように持っていて幾年が過ぎた。これをあなたにあげるから、読んでみたまえ。私の望むところを無にしないのであれば、珍しい杜甫のうたが妹の手から改めて生まれることを願うだけだ。

(許筠、〈妹の蘭雪軒に送る杜律の巻の裏に書く〉)

妹に対する兄のありったけの愛情が注がれた詩と文章である。文房具を送り、秋の風景を描かせ、中国の使行中に手に入れた杜甫の詩集を宝箱のように持ってきて妹に渡し、杜甫のように卓越した作品が書けることを期待する。後日、許筠が李珣を弾劾しようとしたため、宣祖の恨みを買って、流罪で甲山に流された時、許蘭雪軒は兄宛ての手紙に次のような詩を書いている。

遙か遠き甲山に配流する旅人

遠謫甲山客

咸鏡道に向かう行色は多忙極まりない

咸原行色忙

臣下は賈太傅と同じだけれど

臣同賈太傅

君主は楚懷王ではなからう

主豈楚懷王

河水は秋の岸に平らかに流れ

河水平秋岸

辺境の雲は夕陽に流れる

關雲欲夕陽

霜の風が吹き雁群れは去るけれど

霜風吹雁去

途中で断たれて行列を成しえない

中斷不成行

〈甲山に配流する荷谷を送りながら(送荷谷謫甲山)〉

兄を流刑地に送る妹の悲しい気持ちが、秋日の夕焼けを背景に寂しく広がっている。遠い流刑地に向かう兄のみすばらしい身なりから長沙に配流された賈太傅が浮かべられ、讒訴であることを分からず忠臣の屈原を流刑にした楚懷王と国王の宣祖が重なって見えてきた。一列に並べられない雁の群れを通じて、未来への不安感と遙かなる別れに対する同気味の憐れみが視覚的に形象化されている。

何一つ不自由ない許蘭雪軒であったが、15歳頃、

4) 以下、許蘭雪軒の漢詩の国文翻訳はキム・ソンナム『許蘭雪軒詩の研究』昭明出版、2002年とキム・ソンナム『許蘭雪軒』東文選、2003年を引用し、別途の脚注は省略する。

金誠立と結婚してから不幸が始まったとみる見解が主流となっている。金誠立は文章と学識が許蘭雪軒に及ばず、夫婦関係も良くなく、嫁姑の不仲問題もあったという。許筠は「私の姉婿金誠立は經史を読む時は舌もちゃんと動けず」とも評したという。安東金氏の門閥貴族の家であった金誠立の先代は科挙及第以後、官位の高かった人物が少なくなかった。しかし、金誠立は科挙の試験に何度も落第したが、許蘭雪軒の死後、漸く文科の末席である丙科に合格した。さらに、人生において務めた官職の中で、最も地位の高かった官職は正九品であった。こうした金誠立は読書を口実に外泊が多く、妓房の出入りもまた多かったようである。そのため、一人で夜を過ごすことを余儀なくされた閨房の悲しい心情について許蘭雪軒は次のような詩に込めている。

月明り籠った屋根裏に秋が盡すと玉屏風が空となり
月樓秋盡玉屏空
霜降りた葦原に暮れる鴻が下りる

霜打蘆洲下暮鴻

瑟を一曲調弾いても彼は帰ってこなく
瑤瑟一彈人不見
蓮華だけが池の真ん中上で萎れている

藕花零落野塘中

〈閨恨〉

黄金で作った明月珠の装身具
君に贈って付けさせた
道上に捨てても惜しくないけれど
新しき恋人には渡さないでくれよ

精金明月珠
贈君爲雜佩
不惜棄道傍
莫結新人帶

〈雜詩〉

寂しい秋の夜、いつものように葦原にやってくる雁と琴で心を慰めながら、待っても帰ってこない夫がはっきりと対照を成し、閨房に一人残された自分自身の嘆かわしい気持ちをあらわしている。萎れる蓮華は詩中の語り手の比喩であろう。二つ目の作品では装身具を夫に贈りながら、愛情を伝える一方で浮気を恐れる気持ちが描かれている。

このように夫を恋しがる詩もまた男性らに淫蕩だ

と評され、世間の噂となる。

蘭雪軒の許氏は正字金誠立の妻であるが、当今の閨秀のうち最上である。若くして夭逝したが、詩集が残っていたので刊行された。一生琴瑟相和すとは言えない夫婦だったため、恨めしい気持ちや恋しがる感情が描かれている作品が多い。蘭雪軒の采蓮曲は次のようである。

秋の日浄くて長い湖の碧玉のような水

秋浄長湖碧玉流

荷花深い処に木蘭の船を繋ぎ
逢郎に逢い水の隔るところに蓮子を投げる

荷花深處繫蘭舟

逢郎隔水投蓮子

人に知らされ半日羞めた
遙被人知半日羞

遙被人知半日羞

中国の人々が彼女の詩集を買って『耳談』に載せるに至った。金誠立の若い頃、川辺の家で読書をしてきたが、彼の妻の許氏が詩につけて謳ったという。

燕は簷の斜めに両々飛び

燕掠斜簷兩兩飛

落花は乱して羅衣の上に落ちる

落花撩亂拍羅衣

閨房で見渡す限りの春の生気に傷つき

洞房極目傷春意

草色が緑になっても江南の郎は帰って来ない

草綠江南人未歸

この二つの作品は流蕩に近かったので詩集には載せなかった。

—— 李睟光、『芝峰類説』

許蘭雪軒に対する李睟光の評価は示唆するところが非常に大きい。まず、彼が引用している作品を見てみよう。一つ目の采蓮曲の話者は女性である。澄んだ秋の日に、湖上に舟を浮かべて、蓮の実を取っていた乙女は、目を引く乙男が見えると、大胆に蓮の実を投げながら誘いかける。しかし、ついに他人にその内情を気づかれ、半日ずっと恥ずかしくてい

られない。その年頃であれば当然燃え上がる異性への好奇心と恥かしさは止められない。その若々しい内面の欲望をふっくらとしたタッチで描き出している。次の作品も同様である。勉学のために離れている夫を恋慕う若い妻の密かな情感を素直に現わした作品も平凡ではない。彼女のうごめく欲望は生き生きとした春を背景に、つがいで飛び交っているツバメと舞い散る花びらのように力動的であるため、寂しい閨房に閉じ込められるのは難しいようである。卓越した詩人であったにもかかわらず、許蘭雪軒が時代と不和になった根本的な要因はここにある。彼女は欲望の自然な流れを自分自身の奥底に秘めず、詩的に再現したのである。人間本然の官能的な欲求を詩心に載せたため、彼女の詩はつねに淫蕩だという評価が下されたのである。許蘭雪軒の自由な魂は、朝鮮時代の閉鎖的な家族制度には馴染むことができなかつたであろう。彼女の夢が閨房に安住することなく、敷居を超えて世界を向けていたことは彼女の詩篇から確認することができる。そのため、許蘭雪軒の詩において閨房という詩的な空間は、孤独と涙が点綴された悔恨のイメージで溢れている。

鏡が暗く鸞も舞を休み	鏡暗鸞休舞
樑は空いているのに燕は帰ってこない	樑空燕不歸
香はまだ錦の蒲団に残され	香殘蜀錦被
涙は羅衣をとめどなく湿させた	淚濕越羅衣

(…後略)

〈李義山體に效い（效李義山體）〉

閨房の婦人の寂しさと哀しみが色濃く滲んでいる作品である。捕らえられた籠の中の鸞が伴侶を失い、食べることも泣くことも止めていたが、鏡に映したら切なく泣いてはその鏡にぶつかって死んでしまったという苦しい思いが背景となっている。この詩における鸞は、愛情と自由を失って絶望する許蘭雪軒の分身である。帰ってこないツバメは夫の表象であるといえる。夫婦間の温かい情感と信頼が失われた空間、これを家庭とは言えないであろう。

さらに不幸が続き、彼女は幼い子供二人とも死別

し、より絶望の深淵に沈んでいく。分裂した家族の領土から彼女を回復させたのは、母性のただ一つしかなかったが、子供の喪失により母性の存在意義をも失ってしまったのである。

去年は愛しき娘を喪い	去年喪愛女
今年に愛しき息子を喪った	今年喪愛子
哀しくて悲しき光陵の土よ	哀哀光陵土
双つの墓が相対して起っている	雙墳相對起
蕭々たる風は白楊の木に吹き	蕭蕭白楊風
鬼火が松楸の中で明る	鬼火明松楸
紙銭を燃やし汝の魂を招き	紙錢招汝魂
酒注ぎ汝の墓に奠る	玄酒奠汝丘
兄弟の魂は	應知弟兄魂
夜々相い追うて遊んでいるだろうか	夜夜相追遊
縦しんば腹の中に孩が有るけれど	縱有腹中孩
安んぞ成長するを冀えるだろうか	安可冀成長
止めどなく悲しき詞を謳い	浪吟黃臺詞
血涙を流し悲しみの聲を呑み込むだけだ	血泣悲吞聲

〈子供を哭す（哭子）〉

許蘭雪軒の家族史的な不幸は、これでは終わらない。子供とともに彼女を詩人に導いた次兄が同じ時期に夭折したのである。流刑から解放された許筠は官職に懐疑を抱き、放浪生活をしてしたが、過飲が原因で黄疸となり、38歳の年で金剛山で死を迎えたのである。許蘭雪軒にとっては最も心強い後援者であった兄が、落ちぶれて非業の死を遂げたため、彼女がどれほど絶望的であったかは計り知れないだろう。

上記で述べたように許蘭雪軒の詩が流布して以来、彼女の詩に対する二つの否定的な評価は今にでも論難されている。一つは中国の詩を盗作したということ、もう一つは詩の内容が淫蕩であるということである。しかし、反論の方が最も優勢である。盗作ではなく換骨奪胎したものであり、創作の当時朝鮮の詩壇を講習した學唐の復古主義的な傾向を考えるべきだという主張である。淫蕩だという評価も同じ

である。彼女の豪放な性格上、愛情と情感の真率な表現は当代の性理学的な倫理観と衝突をせざるを得なかったのであり、性理学的な倫理観によって淫蕩だと徹底的に貶められたのである。

如何に苦しいといっても一度結婚した以上、士大夫家の嫁は嫁ぎ先から離れてはいけない。その代りに彼女の精神は想像の空間を通じて抑えられた自我意識を思う存分發揮する。女尚書になって皇帝の詔書を待つなど、男性と同様に社会的な自我実現の熱望を宮詞の形式で描いたりする。彼女が広げた極限の想像力は女流詩としては空前絶後であり、作品の中で最も多い分量を占めている遊仙詩から実現されている。不条理な現実を超えて彼岸に立てられたこの理想世界では抑えられた自我の希望を思う存分実現し、欲望の能動的な変異が自然に生じる。しかし、その神仙の世界も愛と嫉妬、孤独と人待ちのあるごく人間的な雰囲気漂う空間であったという点に特異性がある。

3. 不条理な現実社会に対する批判的な認識

最初から許蘭雪軒が閨房に封じ込めることが出来ない人であることは、彼女が持ったという三つの恨から明らかである。自身が女として生れたことと夫の金誠立と結婚したこと、最後に朝鮮の地で生れたことが彼女の恨であったといわれている。こうした陳述から、彼女の批判的な現実認識の断面が見てとれる。儒教の家父長制下における極めて厳しい性差別、不平等な夫婦関係、矛盾的な社会体制などに対する彼女の鋭い認識や、見直されていく展望が全く見えない現実が、絶望と恨で固められたのである。それゆえ、彼女の詩から社会矛盾を鋭くとらえた作品を見つけるのは難しくない。

容色はあに乏しくもあらず	豈是乏容色
裁ち縫い機織り手際がよいけれど	工鍼復工織
寒門育ちだから	少小長寒門
媒婆はわかってこない	良媒不相識
夜久しくして休まず機織り	夜久織未休

憂々たる織機の鳴音が寒い	憂憂鳴寒機
織機にかかった一疋の絹糸	機中一疋練
終に誰の衣になるだろうか	終作阿誰衣

手に剪刀を把り裁ち切り	手把金剪刀
寒い夜十指は硬直し	夜寒十指直
人の為に婚礼服を作るけれど	爲人作嫁依
年々独り身に還される境涯	年年還獨宿

〈貧女が吟ずる（貧女吟）〉

貧しい乙女の苦しい労働現実を繊細に描いた作品である。美しい姿と優れた裁ち縫いを堂々と自慢する態度が決して憎くない乙女がこの詩の話者である。しかし、自信に満ちた態度は貧しさによってすぐに収まる。貧しい家の娘は媒の老婆にそっぽを向かれる。この詩は個人の持った能力と資質よりは身分や貧富の程度がその人の社会的な関係を規定する桎梏の現実を問題視している。夜も寝ず紡いだ絹は裕福な家に服地として使われる社会現実が問題である。収奪と搾取の労働現場において貧しい庶民少女の疎外感が増していく。最後の部分においてリアリティーは最も卓越している。戸の隙間から強い風が入ってくる冬の夜、ハサミで裁断する乙女の手は凍え、この苦しい労働はついに他人の婚礼に必要な礼服を作るためである。十分な資質と才能を持ち、あらゆる苦痛を忍び、仕事に尽力するが、彼女は結局配偶者を得ることができない。自身の労働の結果からも徹底的に疎外されるのである。こうした点でこの乙女は許蘭雪軒の分身でもあると考えられる。また、中世の家父長的な男性文化の中で抑圧された朝鮮の一般女性に対する提喩の表現であるとみてよいだろう。

道を挟んで十萬戸の色酒家が立ち並び	夾道青樓十萬家
家々門前に香木の車が停まっている	家家門巷七香車
春の風が吹き想思の柳を折り	東風吹折相思柳
駿馬に乗った男は驕り高ぶり落花を踏みにじる	駿馬驕行踏落花

〈色酒家の唄（青樓曲）〉

楽府体で書かれたこの詩は、素材の側面では型破りである。閨房の婦人が色酒家の風景を扱ったのは、厳格な朝鮮社会では愕然とすることであった。閨房の敷居を超えた許蘭雪軒の詩の世界は憚ることなく広がっている。

前半は色酒家の外部風景、後半は室内で行われる肉欲的な饗宴に対する比喩である。数多くの色酒家の前に並んでいる高級の車に対する描写には、欲望の節制を基本的な道德律としていた儒家の士大夫の二重性に対する風刺の視線が色濃く描かれている。さらに、帰ってこない夫を待ちながら夜を明ける妻たちもまたその車の数ほどいるはずである。

色酒家で永遠の愛は期待できない。愛を交わした恋人は立ち去るたびに、柳の枝を折って手渡し、別れの挨拶をするが、涙もまだ乾かないうちに、駿馬に乗ってきた新しい男を迎える。三流の妓女を指して「客店の尿瓶」と事物化した表現も存在する。こうした事情からも分かるように、妓女は数多くの男性の性的欲望の収容所として運命づけられており、そのように仕込まれている。「落花を踏みにじる」という表現から愛情なく行われる性的暴力に対する怒りの情緒と、それを堪忍しなければならない妓楼の女性たちに対する憐憫と情感が感じられる。

以上のように許蘭雪軒は社会的少数者、抑圧された人、才能を持っても正当に待遇されない人に対して自身の詩的な関心を寄せている。

近頃白光勳と崔慶昌らが	近者崔白輩
盛唐に従い詩をまなぶ	攻詩軌盛唐
廖々たる大雅の韻律が	寥寥大雅音
此等に出会い再び鏗鏘の音が響く	得此復鏗鏘
下っ端役人としての生活	下僚因光祿
辺境の地方官務め積薪が悲しい	邊郡悲積薪 ⁵⁾
年や地位が共に零落し	年位共零落
漸く信じられるよ詩は人を窮めることを	

始信詩窮人

〈偶然に感じる（感遇）〉

5) 積薪：後から来た者が重用され、前からいた者の地位が低いことを言う。

当代最高の詩的な力量を發揮した三唐派詩人たちの現実的な不遇さを謳った作品である。彼等の立場はどうだったろうか。校理をしていた李秀咸の庶子として生れ、母親が官妓であったため、放浪と挫折の不遇な一生を送った李達。許蘭雪軒の師匠でもあった彼は、若くして読んでいない本はないほど博学で文章にも強く、刻苦の努力の末に童詩風を成就したが、庶子の差別待遇によって止められ、出仕が難しかった。そのため、彼は悲哀な情調のもとに創作した作品が多い。崔慶昌は29歳に大科に合格した後、北評事の司諫院正言を務めたが、不条理な政治現実に慣れず、自身の孤高のために生じた貧困を詠いながら自身の価値観を守るという決意を詩を通じてあらわしている。白光勳は一生窮乏でありながら科挙をもって出世する道をあきらめた。彼の詩は現実での敗北と諦念、田園における平穏な人生を主に詠っている。許蘭雪軒は彼等の不遇と現実的な疎外について残念に思いながら、結局は詩が人を窮乏にさせるという既存の意見に納得している。宋代の歐陽脩は窮乏が詩の精巧さと呼び起こしていると言ったが、まさに三唐派の詩人たちは落ちぶれた人生の具体的な体験のもとに、悲哀と孤独、挫折などの情感を写實的に描いている。才能のある人が疎外されているのは、現実の政治問題である。許蘭雪軒はこの点も見逃さなかったのである。

三唐派の詩人たちは悲哀と孤独、挫折と不満を主に描いていたが、これは現実を暗澹で、混濁したものと見た彼らの世界観と一致している。彼らの文学史的な意義は、同時代の詩が盗作と論理に偏って難解であった傾向から逃れ、唐詩風の創作活動を通じて人間的な情緒を真率に描いたところにある。彼らは詩を、技巧や術学の誇示、心性修養の一方便として考えられていた風潮に立ち向かい、人生の具体的な体験をもとにした情感を充実にあらわした。

東家の勢道が炎のようで	東家勢炎火
高樓にて風楽の音は高くなるけれど	高樓歌管起
北の隣人は貧しくて衣無く	北隣貧無衣
餓えた腹を抱えて小屋にいる	枵腹蓬門裏
一朝高い権勢が傾いたら	一朝高樓傾

反って北の隣人を羨ましがらるだろう 反羨北隣子
 盛衰は逡いに代っても 盛衰各遞代
 天理を逃れること難し 難可逃天理
 〈偶然に感じる（感遇）〉

この作品は豊饒を謳う勢力家の生活と窮乏で苦しむ貧しい民衆の人生とを対比させることによって現実政治の不条理さを鮮明に浮き彫りにした作品である。儒家の政治において民本や愛民が口号に止まってはいけない理由は何だろうか。おそらく封建体制の根幹を形成する物的基盤は、一次的な生産階層によって直接提供されているからであろう。したがって、人民の保護は即ち体制の保護であるといえる。しかし、為政者の収奪と搾取の中で人民の人生は危うく、不義の権力をもとに治者の風楽の音が高くなるという行政が日常的に行われている。許蘭雪軒は権力の限時性と天理の恒存性を挙げて警告している。

この詩はより多義的に読まれるが、東家は東人勢力、北隣は西人勢力で朋党政治期の現実政治を標的にしたと考えられる。すなわち、派閥と党派の対立によって血なまぐさい政争を続けていた現実政治に対する風刺であるという解釈もできよう。

一千の人が一斉に杵を持ち 千人齊抱杵
 土の底を押し固めたら隆々たる土の響き
 土底隆隆響
 努力して良くも城を築いてはいるけれど
 努力好操築
 辺境の土には軍士を大事にする牧民官はいないだ
 ろうか 雲中無魏尙

城を築き又城を築き 築城復築城
 城が高く賊を遮ることはできるけれど
 城高遮得賊
 但し恐れるのは賊が多く来ると 但恐賊來多
 城は有るけれど遮ることはできないだろう
 有城遮未得
 〈築城を怨ずる（築城怨）〉

この作品は辺境地域の苛酷な築城工事に動員され

た軍卒と人民の酷烈な労役について批判した作品である。頻繁な労役で民衆は農事に失敗しがちで、これは百姓をより窮乏にさせてしまう代表的な暴政の一つである。

城を高く築いて何の意味があるだろうか。わずかな盗賊は防ぐことができるが、大規模の外敵が侵略してきたらどういう手で防ぐことができるだろうかという疑問である。堅固な万里の長城であったにもかかわらず、女真の兵士たちは容易く北京に進入した。明の山海関の門は外敵ではなく、内部の敵によって開けられたのである。内部の敵によって自ずと開けられたのである。そういった意味で治民と国防の要策は城の物理的な大きさにあるのではなく、仁政を施して百姓の心をとらえることにある。彼らが自身の国を必ず守るべき国であると考えるのであれば、城のない野原であるとはいえ敵を撃退することができなくもないであろう。

このような作品からみると、許蘭雪軒は兄や弟に劣らず、国家経営に対する局量とビジョンを持っていたことがわかる。自身はもちろん下層民全体を落ちぶれるような凄まじい現実世界をどうすべきか。「遊仙詩」の中の一作品からその手掛かりを見つめることができる。

催して雪神の膝六を呼ぶと天の門から出る
 催呼膝六出天關
 雪を踏み風に吹かれ寒さは骨に徹る
 脚踏風龍徹骨寒
 袖の裏の天国に玉塵の三百石が 袖裏玉塵三百斛
 飛び散る雪は人間の世に落ちる 散爲飛雪落人間
 〈遊仙詞 27〉

膝六は雪の神である。『太平広記』にその説話が伝わっている。狩猟期に人間が狩りの準備をしていた時、死の脅威を感じた動物たちが雪の神の膝六に救援を求めた。膝六は大雪を降らして人間の足を奪い、動物の命を救ったという話である。

利己的な欲望と不条理な政治、少数者に対する圧迫と人民に対する搾取が蔓延した絶望の地である地上世界を救うために許蘭雪軒も同様に、平和と生命

の神である滕六を登場させている。滕六が天から降らした純白の雪片は、汚れた世界を浄化して、純潔な空間へ再創造しようという彼女の発願を描いたものである。

4. 地上の公的領域と天上の完全なる自由

抑圧的な現実が絶望を生み、自律的な女性主体として活動できる空間が立錐の余地よりも狭い時、単に女性だけではなく数多くの民衆の苦しい呻き声が響く時、解放の空間は何処から設けることができるだろうか。現実的に公的な領域に全く参加できなかった許蘭雪軒は、ついに想像の世界からその解放区を探り出す。女性も男性のように統治行為ができないだろうか。

千午閣の下に朝がおとずれ 千午閣下放朝初
箒を擁いた宮人が玉の階段を掃除する

擁箒宮人掃玉除

日午に大殿から詔書が下されると

日午殿頭宣詔語

珠簾越しに女尚書を催して喚ぶ 隔簾催喚女尚書

新しく飼う鸚鵡の羽がきれいではなく

鸚鵡新調羽未齊

鳥籠に鎖し玉楼に向かって生きさせる

金籠鎖向玉樓棲

閑かに翠色の首を廻し珠簾に立ち

閑回翠首懷簾立

ふいと君王に隴西地方を説く 却對君王說隴西

〈宮詞 4〉

許蘭雪軒の詩的な想像力が創り出した、一番目の社会的な空間は宮中である。宮中の日常事や宮女の欲望を素材にした『宮詞』20首の中で一番目の首が上記に引用した作品である。殿閣の軒下に朝日がさしたら宮人は慌ただしく玉の階段を掃くことから一日が始まる。やがて正午になると、大殿では女尚書を急いで呼ぶ。詔書を下すためだという。女尚書というのは何だろうか。中世時代の中国の幾つかの国

において宮中の文書発受のために設けた職責で、文字が分かる女性はその官職を務めた。先行研究では、こうした点に特に注目し、許蘭雪軒の「社会的な欲求に対する役割期待を転移」させている部分であると解釈している。彼女は優れた才能と学識を備えた女性として、一度は経世の理想を抱いただろうが、朝鮮の政治現実では実現できる所はどこにもない。それゆえ、男性にだけ許された社会的な自我実現の道を、許蘭雪軒は、詩的な空間において新たに創り上げているのである。女性とって官職の世界に向けて経世済民の夢を叶えられない理由はないだろう。

二つ目の作品にもこうした希望を投影している。鳥籠は、鳥にとって出入りが撤廃された抑圧の空間である。しかし、この作品において意味するところは異なる。宮殿で新しく鸚鵡を飼おうとするが、羽毛がきれいに生え揃ってなくてみっともない。羽毛がきれいに揃っていないということは傷を負った状態であるか、まともではない不具の鳥であるかをあらわす。こうした鸚鵡は自由に飛べないので、誰かに面倒を見てもらわないといけなくなる。したがって、鳥籠は不具の身が安息できる巣であり、気楽に生命を維持することのできる空間である。

生命体に対する温かい愛情のある場所において、宮中の女官は国王と長閑に政事を話し合う。おそらく隴西地域⁶⁾に関連してどうすれば百姓の福利を増進させることができるかという問題についてであろう。

近日西宮は萬機で煩い 西宮近日萬機煩
宮女を催して宮殿の門を啓き 催喚昭容啓殿門
君主の前で燭を持った女官が仰い

爲報榻前持燭女

漏刻の音が紫薇垣にて三度も鳴り

漏聲三下紫薇垣

〈宮詞 19〉

泰平の世の中での宮殿はのんびりとできるものの、国政が忙しくなれば国王と女官は夜が明けるまで対

6) 中国甘肅省の西方一帯を指す。

策を練る。夜の三更となり、全ての人が寝静まっている時にも、最高の統治者は女官職と一緒に政務で多忙である。このように為政者が勤勉し、夜明けまで職責を全うする時、百姓はより幸せになれるのである。

『宮詞』にあらわれている想像は現実的な欠如を補足してくれる。しかし、このような想像が地上空間において広がる時、現実的な真偽の問題にかかる。そのため、許蘭雪軒は彼女の詩的な想像力を超越の世界へまで推し進めていく。

現実において挫折した夢はもはや地上において設定された想像の空間さえ超越し、遙かなる虚空の上の神仙的な空間にまで繰り広げられる。許蘭雪軒の作品の中で最も多い部分を占めている「遊仙詩」の世界は、そうした空間を背景にしている。神仙世界においても慕う心と愛情と歓喜、離別と嫉妬といった人間的な情感があふれる空間であり、そこに住んでいる神仙の間の上下秩序もはっきりしているが、この世界では各自の自由な欲望の実現があまり難しくない。このような世界を描こうとするのであれば、まず彼女自身がそこに入るべきであろう。

仙人が美しき綵鳳に騎り	仙人騎綵鳳
夜中に朝元宮に下した	夜下朝元宮
絳い幡は海雲の上になびき	絳幡拂海雲
霓衣は春風に擦れ合う	霓衣鳴春風
瑤池の岑にて我を邀え	邀我瑤池岑
我に流霞酒を飲ませてくれた	飲我流霞鐘
我に緑い玉杖を借て	借我緑玉杖
我を芙蓉峯に登らせてくれた	登我芙蓉峯

〈遣興 6〉

美しい鳳凰に乗って、虹の衣をひるがえしながら我を迎えにくる神仙は、ほかならぬ西王母である。西王母は瑤池で許蘭雪軒を迎えて仙界最高の酒である流霞酒をすすめる。一口だけでも飲めば、餓えと渇きが満たされるという想像の酒である。以後、神仙の緑色の杖を借りて、彼女自身が創った仙界の白玉楼へ昇天する。荘厳な風景である。とはいえ彼女が地上世界に対する関心を完全に断ち切ったろうか。

そうではない。

伏せて願います、この大梁を乗せかけた後に、桂木の花萎れず、美しい草に永遠の春を許して下さい、銀色の窓辺が夕焼けに照らされたら下に九万里の微々たる人間世界を見下して下さい、玉の門が海に到れば三千年間清々たる桑木の畑を微笑みながら見守って下さい。

〈月中の白玉楼の上梁文〉

彼女は、依然として人間世界を見下しながら見守られることを祈っている。一人だけの幸せを求めるよりは、残された地上世界に対する愛情が深い。彼女が到達した天上世界はどういうところなのか。

祥瑞の風が吹き翠色の裙がひるがえり

瑞風吹破翠霞裙

手に鸞簫を把り五雲の雲に倚り 手把鸞簫倚五雲

花の外には玉童が白虎に鞭打ち 花外玉童鞭白虎

神仙の城の中で小茅君を邀える 碧城邀取小茅君

〈遊仙詞 4〉

上記の作品では、一人の仙女の愛の物語が描かれている。風に揺れる翠色の裙、五色の雲の隙間から響く鸞の笛音、花が咲き誇っている天の庭の外では、仙女玉童の鞭打つ音で騒がしい。得度して神仙になった小茅君を、白虎に乗せて迎えるためである。五色の雲がわき起る、花の咲きかけた庭で翠色の裙を翻しながら小茅君を待つ仙女の心には愛情が燃え上がったろう。ここには少なくとも原初的な欲望を妨げる社会的な規律や不条理な制度、抑圧的障壁は存在しない。女性が自分自身の自由意志を、主体的な情感を思う存分に放つことのできる真の解放区である。

また、この世界は愛する人がいれば、自由に再婚ができるところでもある。次の作品を吟味してみよう。

青童が嬪で過ごした一千年 青童嬪宿一千年

天水の新郎と好縁を結び 天水仙郎結好縁

空の音楽は夜遅くまで庇外の月まで響き

空樂夜鳴簷外月
北宮の仙女も珠簾の前に降りてきた
北宮神女降簾前
〈遊仙詞 37〉

青童は人間世界に心を寄せたという罪で上帝に罰せられ、地上に降ろされた仙女である。大胆であった彼女は、天水少年の趙旭に熱烈に求愛し、ついに縁を結ぶ。千年の間、寡婦として生きてきた青童の再婚祝宴に音楽は欠かせないだろう。天の音楽が騒々しく月にまで鳴りひびき、北宮の仙女である姮娥も賀客として参席する。寡婦の改嫁禁止という朝鮮の律法とは異なり、寡婦の仙女も素敵な新郎を求めて愛を結ぶことができるのである。いわゆる憚りのない自由恋愛がこの天上空間では可能である。

これだけではない。仙界の仙女と男神は自由に交わり、肉体的な性愛を楽しんだりもする。次の場面は周辺の雰囲気のみで濃密な性愛をあらわした秀作である。

煙で空が鎖され鶴も帰ってこれず
煙鎖瑤空鶴未歸
桂花の蔭には枝折戸も閉まっている
桂花陰裏閉珠扉
溪には尽日神靈的な雨が降り
溪頭盡日神靈雨
地に満ちている香雲も湿めて飛べない
滿地香雲濕不飛
〈遊仙詞 10〉

閉まった枝折戸と神妙に降っている雨、濡れている香ばしい雲の中で、彼らが何をしているのかは聞かなくても自明なことである。このように本能的な愛欲の自由な実現、生殖とは関係のない身体的な欲望の具現、これは男性的な儒教文化において抑圧されていた女性の性が、彼女らの自由意志によって実現できる新たな理想世界の表現にはほかならない。しかし、これはわずかな葉擦れの音でも容易く壊れるような、単なる夢としてしかいられないのは誰よりも許蘭雪軒の自身はよく知っていたはずである。

ついに彼女は、27という若い年で地上での生涯を閉じた。のちに許筠は、彼女が自身の運命を予言した詩として、次の作品を挙げている。

(上略) 突然一片の赤い雲が天から降りて峰の上を覆った。鼓を打つ音で驚いて目を覚めると、枕元に夕焼けがまだ残っている。恐らく李太白が天護山を逍遥した境地がこのようなものではなかったろうか。これについて記す。

碧海は瑤海を侵し	碧海侵瑤海
青鸞は彩鸞に倚る	青鸞倚彩鸞
芙蓉の二七本が	芙蓉三九朶
紅く墮り秋の月明り寒い	紅墮月霜寒

(夢で廣桑山にて遊んだ詩の序文 (夢遊廣桑山詩序))

この作品には全般的に墜落のイメージが強い。序文の「突然一片の赤い雲が天から降りて峰の上を覆った」という部分には下降とともに不吉なイメージが含まれている。彼女が作った詩は青色と赤色の補色対比が明らかに見える。青い海が玉色の海を侵し、果てしない青一色に染められている。その上に紅い蓮華が27本落ちる。落花というのは、花の生命力が尽きた瞬間である。27本は、許蘭雪軒の歳である27歳の象徴であり、落ちる蓮華は、嘆かわしい人生の幕を閉じる許蘭雪軒自身であろう。

5. おわりに

本稿は女性主義的な観点から、許蘭雪軒の人生と彼女の詩の世界を再解釈してみた一種の詩論的な論文である。許蘭雪軒は彼女自身が生きていた当代においても、詩名を高めた死後においても、数多くの誤解と非難を受けてきたのであり、今日においては悲運の天才詩人として同情の対象になっている。しかし、許蘭雪軒の詩の世界が正当に評価されるためには、彼女はもちろん、朝鮮時代の一般女性の存在論的な状況と家父長的な規律権力に対する理解が先行しなければならぬ。さらに、女性として男

性の権力の表象であった文字を所有したという事実に対する社会史的な意味を穿鑿しなければならない。以上のような点を踏まえながら進めた本稿の論議を、要約して結論にしたいと思う。

許蘭雪軒の初期作品は家族をもとにした作品が多い。流刑となった兄に対する思いや、夫を待ち続ける寂しさを主題にした作品群である。特に、夫に対する愛情を描写した作品では、本源的な愛情の情感を真率にあらわしたため、男性らに淫蕩だと評される。しかし、夫と不仲であったため、彼女の詩は閨房の孤独感と疎外感をあらわす作品が多くなり、さらに幼い子供たちが世を去ると、彼女の詩の世界はますます絶望の深淵に沈んでいく。

以後、彼女の詩は家族的な境界を超え、社会的弱者に関心を寄せる。富貴な家の婚礼のために冬夜の極寒にもかかわらず、機を織る貧しい乙女を通じて収奪と搾取の労働現実を問題視し、色酒家の風景描写を通じて儒家士大夫の二重性に対する風刺と、妓楼の女性たちに対する憐憫の情感をあらわしている。三唐派の詩人の不遇な人生に対する嘆きはもちろん、人民の収奪を通じて謳歌される、勢力家の風楽に対する警告のメッセージを詩の中で描いている。築城工事の労役に動員された軍士と人民の苦痛を謳った作品では、男性の戦略家に劣らない国家経営と軍事運用に対する優れた眼識を持っていることが分かった。

自律的な女性主体として活動できる空間が、朝鮮の現実では全く存在していなかったため、彼女の後期の詩的脱走は中国の古史の空間と天上の世界へ広がる。前者では古文字が分かる女性たちが、官職を務めた宮廷の空間を通じて詩の世界が広がっているが、公的な領域において社会的な自我実現に専心する堂々たる女主人公が描かれている。後者は彼女の詩的な想像力を神仙世界という超越的な領域にまで広げた作品群である。彼女が描いた遊仙詩の世界は、神仙を対象にしてはいるものの、愛情や嫉妬といった人間的な情感を持っている。しかし、社会現実とははっきりと違う。寡婦も再嫁でき、本能的な欲望を思う存分に実現できる自由な世界であ

る。許蘭雪軒は不遇な現実で27歳という年で夭逝したが、彼女が渴望した真の世界は、この遊仙詩において具現されているといえよう。

参考文献

韓国語

- イ・ファヒョン「許蘭雪軒の生と文学に表れた主体と自由意識の考察」『ウリ文学研究』50号、ウリ文学会、2016年。
- カン・ヘソン編訳『女性漢詩選集』文学ドンネ、2012年。
- カン・ミョンヘ「許蘭雪軒作品の美学的特性」『温知論叢』43号、温知学会、2015年。
- キム・スクヒ『許蘭雪軒詩論』セムン社、1987年。
- キム・ソンナム『許蘭雪軒 詩の研究』昭明出版、2002年。
- キム・ソンナム『許蘭雪軒』東文選、2003年。
- キム・ミョンヒ「許蘭雪軒文学の幻想詩学」、『論文集』36号、江南大学校、2000年。
- キム・ミョンヒ『許蘭雪軒の文学』集文堂、1987年。
- ソン・エンファ「許蘭雪軒の遊仙詞に表れた不遇意識研究」『国語文学』57号、国語文学会、2014年。
- チェ・ヘジン「許蘭雪軒、欲望の詩学」『女性文学研究』10号、韓国女性文学学会、2003年。
- チョ・ヨンスク「許蘭雪軒の宮詞研究」『韓中人文研究』27号、韓中人文学会、2009年。
- チョン・サンギョン「許蘭雪軒の〈夢遊廣桑山詩〉研究」『韓国詩歌文化研究』8巻1号、韓国古詩歌文学会、2001年。
- ナム・ジェチョル「許蘭雪軒詩文学テキストの幾つかの局面」『民族文学史研究』26号、民族文学史学会、2004年。
- ハン・ソングム「許蘭雪軒 漢詩に表れる作家意識研究」『韓国詩歌文学研究』12号、韓国古詩歌文学会、2003年。
- 朴趾源著、キムヒョルチョ訳『熱河日記 3』ドルベゲ、2009年。
- 許蘭雪軒『蘭雪齋集』影印本、キムミョンヒ『許蘭雪軒の文学』（1987）付録。
- ホ・ミジャ『許蘭雪軒研究』誠信女子大学校出版部、1984年。
- 洪大容著、キムテジュン、パクソンジュン訳『山海関 閉めた戸を一手で押し開ける——洪大容の北京旅行記〈乙丙燕行録〉』ドルベゲ、2001年。
- ユ・ユクレ「許蘭雪軒の愛情詩研究」『温知論叢』44号、温知学会、2015年。

本稿は、2019年九州大学韓国研究センターの研究費支援による研究成果である。

The Fugitive Dream of Heo Nanseolheon for the Outside of the patriarchal system

Hyungdae Lee (Korea university)

Abstract

This article is an experimental discussion of Heo Nan-seol-heon's life and the world of poetry from a feminist perspective.

In order to properly reveal Heo Nanseolheon's poetry, it was said that a social and historical understanding of the existential situation of women under the patriarchal system of the time and the correlation between letters and power should precede

Chapter 2 focuses on early works set in family situations. Heo Nanseolheon was praised for his honest expression of his innermost feelings, and created a work that revealed deep feelings of alienation and loneliness due to her discord with her husband and mother-in-law.

Chapter 3 looked at works expressing social interest. The characters she captures are mainly social underdogs and minorities. The painful lives of the people who are robbed and exploited by the state or male power were described in a realistic way as the problematic reality of an irrational society.

Chapter 4 analyzed works that captured the desire to escape from irrational reality. Through the Chinese test, she paints women who focus on social self-realization in the public domain, while enjoying complete freedom in a transcendent, world of Taoist hermit with miraculous powers. The real world she longed for is this kind of wired world.

The conclusion summarizes the above discussion and makes them a conclusion.